

「祖孫一体」の文化を自己教育に生かす

御所園 正信（倫理研究所特別研究員）

はじめに

日本人の食生活は欧米化が進み、動物性食品の摂取量は増加しているのに対して、穀類（とくに米）や食物繊維食品の消費量は減少しているといわれる。服装は非日常的な冠婚葬祭（宮参り、七五三、成年式、結婚式、葬式）などで和服スタイルも見かけるが、日常的な場面ではほとんどの人が洋服を着用している。住まいも洋風化が進み、和室は減少し洋室が増加する傾向にある。和室を造らないケースも多くなってきた。現代の日本人は洋風化した生活スタイルにすっかり馴染んでしまっている。

明治以降の日本は、西洋の文物を導入して社会制度の近代化がなされてきた。政治、産業、法律、教育などの諸制度を模倣して西洋化が進んできた。教育制度も法制度も近代化・西洋化している。西洋の科学文明の摂取によって便利で物の豊かさを実感できる社会になってきた。が、現代に生きるわれわれは、物資の乏しかった幕末期から明治期に過ごした人たちよりも、より人間らしい生活をしている、生活の質が高まっていると断言できるかどうかは疑問である。

1990（平成2）年、バブル経済が弾けてからは閉塞感をもつ人が多くなった。その後21年経っても、日本社会に活気が出てきたようには思われない。NHK福祉ネットワーク「ひきこもり情報」によると、十代から四十代の幅広い年齢層で学校や会社に行かないで自分の部屋で引きこもり状態にある人が、日本全国に50～100万人もいるという。うつ病や躁うつ病にかかる人も増えている。厚生労働省が3年ごとに全国の医療施設に対して行っている「患者調査」によると、1999年（平成11）は44.1万人だったうつ病総患者は、2008年（平成20）には104.1万人となり、9年間で2.4倍に増加している。これらの数字は医療機関に看てもらった総患者数であり、病院で診断を受けていないうつ状態の人も含めるとかなりの数になる。困ったことに出遭うと引きこもったり、心を患ってうつ病などにかかる人が多くなってきた。経済的に不自由のない家庭にも引きこもりやうつ病を患う者が多くある。不安感情をコントロールできずに神経症となり、それがうつ病に移行することもある。現代ではセルフコントロールのできない人が増えてきた。心の自由を失っている生活者が多い。

現代社会においては技術文明は重んじられているが、精神文化は尊ばれているようには思われない。歴史的に伝承されてきた「恩」や「敬」などの固有道徳までもが途絶えようとしている。伝統的な習俗はその国やその民族をそれらしく特徴づけている生活の型であり、道徳の基底をなしている⁽¹⁾。風俗習慣のなかでもよいものは伸ばしていかないと、その民族に文化はなくなってしまう。民族文化の滅亡につながる⁽²⁾。もちろん習俗としての古風そのままの儀礼や道徳がよいというのではない。伝統的な道徳を吟味して、現代にふさわしい風儀・風習の様式をつくりあげていくことは大切である。

今年（平成23）3月には東日本を襲った大地震によってすさまじい被害が発生した。が、その未曾有の震災の復興と新しい日本の創生は、各自の可能性を最大限に発揮してくれる文化なくして、文明としての技術力だけを頼りにしていたのではたやすくはない。困難を克服して復興・創生を成し遂げるためには、生気に溢れた生き方・生活の仕方としての伝統文化の復興とその向上が求められる。

本稿では、かつての日本に熟していた「祖孫一体」の文化を、現代に生きるわれわれの自己教育にどう生かしていくべきかを探る。